

歴史・文化から見た江戸期の大阪の川

Historical or cultural scenes in the rivers of Osaka in the Edo era

大阪市立大学大学院工学研究科 梶原 美里、角野 昇八

1. 背景と目的

かつて大阪は「水の都」と言われるほど、たくさんの河川があり、舟運が栄えていた都市であった。また、大阪市の行っている水辺整備事業は、かつて「水の都」と言われていた歴史を踏まえ、「水の都・大阪」再生に向けて、都市魅力の向上に寄与することを目指す事業である。このように、河川の持つ歴史が見直され、河川整備でも歴史のある大阪らしい河川整備が求められていると考えられる。

そこで、本研究では大阪の河川を対象にかつて人々が河川と親しんでいた様子の調査・分析を行い、現代の河川に活かせるものはないか考察することを目的とする。

2. 人々の行動と風景の抽出と項目分け

「水の都」と言われていた河川の様子を抽出するために、江戸期から明治期を対象に、外国人の書いた旅行記と大坂の河川を描いた絵画を調査した。外国人の書いた旅行記を検索対象とした理由は、文献の検索のしやすさと、外国人である著者が見聞きした日本の姿がそのまま書かれているのではないかと考えたからである。また、絵画を検索対象としたのは、1枚の絵画の中に生活の中の河川に関する極めて多様で大量の情報が含まれていて、当時の河川の様子が視覚的にわかりやすいと考えたからである。

これらの文献から抽出した描写は大項目として「河川的生活への浸透度」と「河川の好ましい景観」に分類した。さらに、前者は「行楽」、「商売」、「祭」の3つの小項目に分け、後者は「川」、「川岸」、「建物」、「橋」、「町」の5つの小項目に分けた。

また、抽出した描写は史実と法令の調査の時と同様に、「外国人の見た大坂」では著者の来日年で、「絵画から見た大坂」ではその作品の成立年で、江戸期を3つに区分した。

「河川的生活への浸透度」の中で、「行楽」の項目を見てみると、江戸期に見られる行楽のほとんどが船遊びの様子である。しかし、明治以降は行楽に関する描写を抽出することができなかった。

「商売」の項目を見てみる。船で行っている商売と

しては、船の上で人々に飲食をしてもらうものと船遊びをしている人に船から船で物を売るものがある。しかし、これらの商売は江戸末期以降は見られない。他に、江戸初期から江戸末期まで継続して行われているのは物資や人の輸送である。江戸末期には蒸気船が現れ、輸送量やスピードも増し、当時、輸送手段として舟運が重要な存在になったと考えられる。

「祭」の項目を見てみると、河川に船を浮かべて、華やかに天神祭を行っていたことや、泥湯などの信仰の行事が行われていたことがわかった。

「河川の好ましい景観」の中で、「川」と「川岸」の項目を見てみると、河川の中にたくさんの舟がある様子がうかがえる。また、河川の中にある舟から陸地へ直接上がれる階段が川岸にあったことがわかった。

「建物」の項目を見てみると、店や家と川を直接結ぶ通路や階段や川の上に突き出た川床のある店や家があることがわかった。

「橋」の項目を見てみると、外国人の目をひくような立派な橋があったことがわかる。また江戸中期の摂津名所図会や江戸末期の浪花百景で橋の絵がたくさん描かれていることから、大坂にたくさんの橋があり、たくさんの橋のある風景が大坂の特徴であったとうかがえる。

「町」の項目を見てみると、川に正面を向けて家屋や店が立ち並んでいたことがわかる。また、川沿いの松や柳などの樹木があり、絵に描かれるような名所となっていたことがわかる。

3. 結論

江戸期の人々は舟遊びを楽しんでいて、舟遊びの舟や、人を運ぶ船の上で人々に飲食をしてもらうサービスがあった。物資や人の輸送は江戸初期から江戸末期まで継続して行われている。

また、舟運が活発であり、川沿いには正面を川に向けた建物が多くあり、川沿いには松や柳などの植物が植えられていた。河川沿いの景観を整え、河川から陸への接続が便利ようになっていて、それほど陸から川、川から陸への行き来があったと言える。